伊勢參宮名所圖會

一

明治二十年
八月於吉日

215

藤波二位季忠卿

二緑園主人

伊勢參宮名所圖會卷之一

目録

齋宮群纍
粟田口天王祭
十禪師祠
佛光寺廟所
鰕沼ゞ井
菅豐長亭粟田寺粟田口寺旧地
日山神明
日岡嶺
天智天皇廟陵
御陵川
護國講寺
京三条橋
青蓮院
同辻の故事
阿弥陀堂
定雅山莊旧跡
號上六軒九軒町
本食上人庵
御廟野
薮の下
人康親王旧蹟
白川橋
門出經ゑ
牛頭天王祠
定法寺旧地
粟田口関白旧蹟
粟田宮旧蹟
松坂
義經ゑ幸松
鏡山
明王寺
毘沙門堂
粟田口
金藏寺
首藤刑部墓
鰕沼ゞ池
田村丸別業
比丘尼坂
粟田山
山科
御陵村
安祥寺
奴茶屋

諸羽明神
袖川原
走井
近江國滋賀郡
関清水
逢坂ゆふ住げ多
関寺
大津里
打出濱
同精神故事
義仲塚
腊所越門
腊所城 并矢橋舟

十禪寺
どうたん茶屋
両國寺
禪丸祠
関小川
関大明神禪丸
長安寺
八丁れの辻
四宮明神
りろこ川
芭蕉堂
天滿宮
腊所の猿

巡地藏
小関紙
逢坂山
関守神
立國觀音
牛の塔
小町庵
同祭礼引山
石塲 并坂迎
同塚
八大龍王社
信腊の濱

四宮川
追分
逢坂関旧蹟
駒迎
関清水禪丸宮
近松御坊
城跡
松本村號鞠社
義仲寺
この川馬塲村別保
八大龍神社
粟津原 并合戦

兼平寺
八幡社
島井川御霊社
樵谷螢 并瀧
源頼朝石塔
暦海尻掛石

田畠社
五百羅漢
芭蕉幻住庵旧跡
石山寺 并祖師法堂
同乳母亀谷石塔
悪源太義平塚

鯖鈴の池
守る川
なつくさの薬師
源氏の同 并紫家七論
汀屐園

塊塚
兼平塚
夢の浮橋
紫式部石塔
龍穴池

凡例

一 此書は一國一覽の物なれば只京都より伊勢參宮の紀行を委曲せり紀行の里程を記さどとつゝも所詣い要用の地名なりとも連綿を似て數筆の巨多を厭ひく文義の略せるもありとゝべし

一 宦道の外左右より見渡を間道の名區は大抵一二里三里の程と限りて本文を連續もるゝ ▲の標を似て分てり

一 寺社神名の古說等の迂怪奇僻も芸文實録紀して妄說に似るいこれを竊闕を似て古書印版に載る怪誕流俗の爰語或い佛說等い姑く從ひ又國して一真に依る物あり

一 名所など昔より爰に幸ども稍年紀暴をとゝ人ども其名所磐に雖きりのい坂士佛の參詣記又長明の記をれて照し合せく止り士佛い足利義詮公の典藥て國學の文人なり長明い所德院の村の人ふく加茂宮の氏人法名所蓮淵とゝ

一 古道の名所を彩道に泥せしりの國い今に從ひく其理も文中に記を

一 近江國建部明神の造りうり欠ホ古道より欠ホ名石も有るもおなじ社攝記
又西びど有り詠畧せり

一 伊勢新名石とつくるりの九十箇所だうこしあり色い大中居宣忠の歌の歌合せの
書よりもどすれ

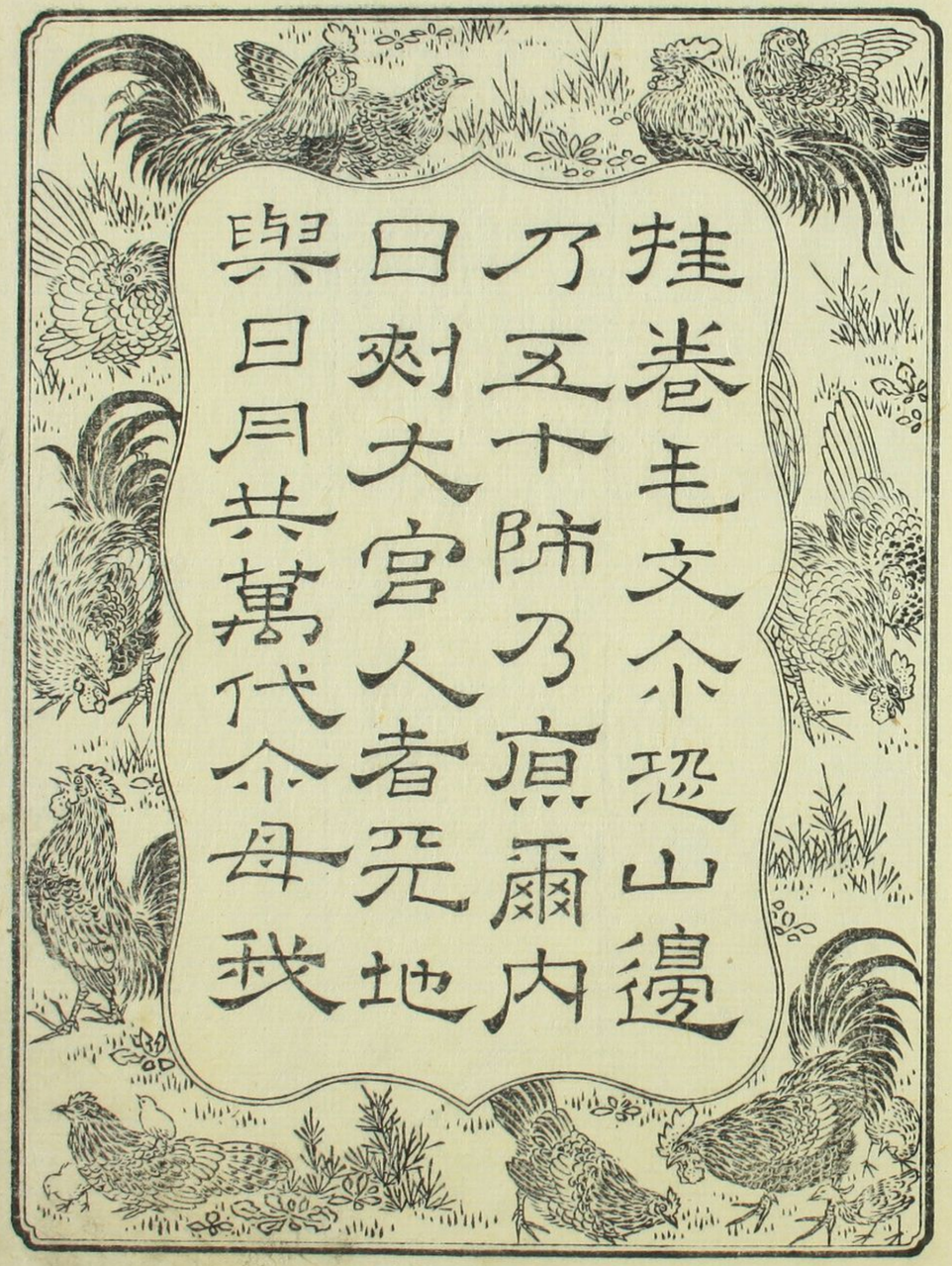
一 名石紀石の名或い松の名などは其の異感ありとつくも是なる俗又考ごくく出せり

一 文中又神社式内と記せ〜い延喜式神名帳載る古社古宮と紛れ〜

一 神書又五部の書などつくるい古書とも考けども学者の説々區々〜て用ふら
い〜きど有り多くい足を引用せど

一 佛刹の縁記又い佛像の出現などは慈と其元と怪〜くせんが為の多くい漁人の
細々引あげ〜等の數十又七八い除きて記さど

一 引書い古書の外い勢陽雜記神都考宮川夜話草の類尚欠中有るよ附記る
ごと〜悉く挙るよ不遑



齋宮群行

昔大神宮の御杖の代々て内親王を齋宮と号せ給ふ三条の院内裏及び堀宮う祇園て都うつり伊勢と號さ給ふを秋宮群行と云其國と成り此書の始と成とつゞる

尚幸実と下の齋宮村の条に本曲と記せり

三條橋
さんぢうのはし
ちをみ
さおん
えもい

大佛
清水
八さか
うぢがは
建仁ち
五条ち
四条ら橋

△されどこの科までの都名所は讓りて実はこゝろを省く其ぞゝぐゝところにこゝろを留めて略と但し洩るゝ補ふ

京三條橋　古岡秀吉公　増田長盛の奉行せしめ作る不也東海道五十三驛これをゝむ橋の系後旅館多し　橋は石柱の盪觴

附盛衰記已関東下向の時は義仲白川の東にして引多紙義経重忠川系の渉ようら五本曾と云しかども川を隔て対合うゝ木曾も僅に二十三騎自田と云ものゝ良ものゝ荒馬を飛てさしもの富小勝堤ゝ三条小川へ引退く所は中三投所むとゝ已とゝ川の勢を飛り木曾をとゝひゝ廣ゝ今河原町とゝ云其川系の西へ

増田は三奉行の一人なり四条五条の格の多ゝ左平記は見えゝり

とゝ長サ三十七丈餘擬寶珠は弱あり

達ゝるもの有其名あり　檀王法林寺△

白川橋　白川りとは白川村を南へ斜は今の南禪寺まで流れ来り西へまゞるて加茂川は入今の檀王其所の落合にして今檀王の裏は市一間餘の堀のゝゝ如あり足元白川筋の跡なり今の白川橋かいを町餘西の方に支流あり南は流る川筋は是を小川とゝ上京の小川と別なり今の知恩院町を約通は大和橋の下へ落る流は平敎盛卿小川の山荘とゝひゝ知恩院町の東にありしるゝ。本曾殿三条小川は退くゝゝ此小川は今古川町と呼不其あとなりそ形のゝゝて溝の大なる流はあり今洛中洛外とゝ古書は皆系白川とあり是は加茂川より系は一面は白川なり但ゝ流は古弱あり略之

（ゆをさゝて小白川とゝ今の是後村　聖田院二条彰地のゝゝとゝ小白川ゝ）

栗田口　此辺りの地名あり上栗田（是は上栗田下栗田とゝ今所は三ゝ）

栗田口は栗田口とゝ云なり

青蓮院　京極大閤師實公の御子行玄大僧正開基也當院筆道の免許あり是を入本道とゝ筆法は尊圓親王を御祖として御代々書院相續ひゝ高逸は侍ゝ御書風を御家流と稱を

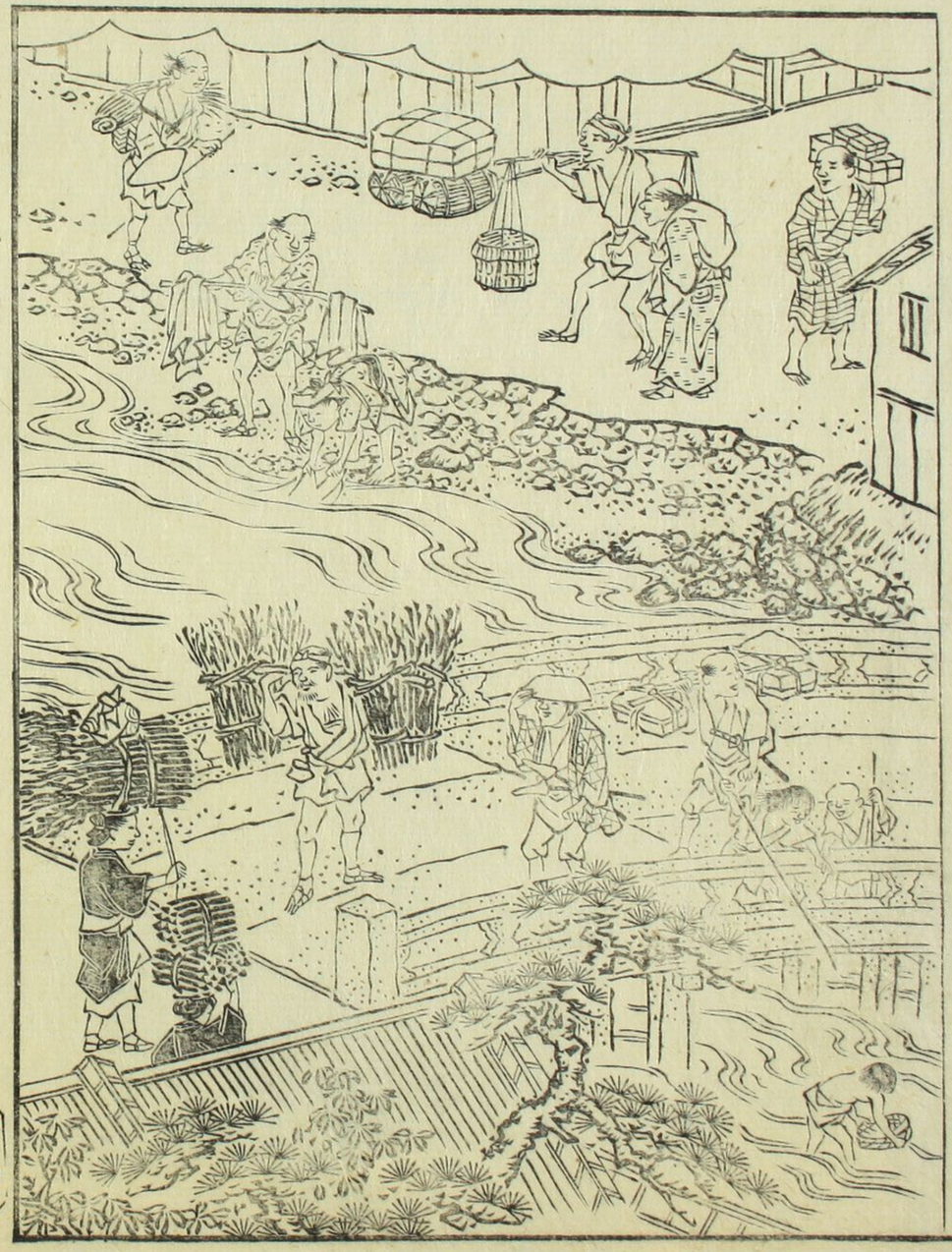
門出蛭子神明社　舊地は聖護院の森の小あり今上の後三条通栗田領にうたゝ其後青蓮院御境内庚申堂の後は移其同地は昭は谷の三条の同地を今は古れ牛若丸奥刄下向の門出に願を掛ゝ所と号とゝ伝ゝ

金藏寺　宋地藏。庚申堂。大師堂（元三大師）　雜財天。尊勝院△

（門の一院ゝて青蓮院の室なり　遊流代ゝ伝多ゝ天社の別當也）

十禪師の神祠　青蓮院境内にあり（百練抄ゝは蓮院の鎮内にあり）古書は十禪師の辻

白川橋



栗田口天王祭
毎歳九月十五日晝夜二度の渡御あり神輿又は鉾の鉾をもて振まわす其余氏の町よりも鉾数多持連て渡る其祢いろいろて美麗なり

晝は栗田御殿より夜は白川橋を渡て水際を智恩院流さくひの一ツ橋へとり此橋の上にて鉾の曲技工妙と尽を其路にて
燒却びさて
きゝゆ國のねゝ
夜寅の刻
なる

又御茶とつゝみあり是い今の黒谷乃廣道 [illegible] 三条通の道を

十禪師の辻とつひ〜〜ならん

附言 義経記又宣商古次牛若伝奥刃へ具ともの所の文又「明日吉日ゆてひろひのおくくの門出ぜり」ひたんどるとゆ〜〜ばさ〜〜ハ栗田に十禪寺のあゆて終んどるそとのさゆひされいこと云師の字とる」の字にも〜〜ハ義経記の書換ゆるべ〜〜又著向集又一条院の御とゝ九寿所十後師の辻とゝ

とゝゆゆあり其ことゝろ國上又ゆゝ。此二ケ条ともゆ十後師ゆ栗田口ゆゝうされを十禪師の辻又ゆ御茶ゆゝくつとゝゆ〜〜一基の社地ゆてあゆ〜〜を後又青蓮院經營のことゝ境内ゆこもらせゆるなるべし

牛頭天王社 青蓮院の東にあり東陽坊忠弘勧請して元弘乙亥

回禄の後只利義尹の産土なりとて明應九年卜部兼倶に命じ

再び勧請ゆて感神院新宮の額あり則栗田口の地社也 例祭九月十日 山城志云牛頭天王三代実録云元慶三年九月四日右上天皇清和院より遷りて栗田院又御を遷又其地又ゆひく樹を植ゆ〜〜

天皇三年、西一ハ栗田口園御又祭る西ハ吉田村ゆあり西天皇と稱を聖護院村と共又ゆあり一ツハ岩倉村又あり東天皇と稱

悪源太義平ゆ忠臣十六騎の一人山内首藤刑部俊通ゆ墓 三条通廣乃ゆ吉田斗東今乃脊戸ゆあり 所人家の○平治の合戦又義朝ゆまけをゆ六条の西ひく敵三騎を討とゆて後みうされゆ

○ 佛光寺廟所△

阿弥陀堂 服檀親鸞上人植髪の為像を安置を△

定法寺門地 堀地御坊と号を宣渕御の記にも見へゆり地名今存を

鍛治ゆ池 良恩ちの傳又曰 ○鍛治ゆ井 青蓮院御境内大谷氏の藪の内又あり 今鍛の名又栗田口物とゝひく苔其 鍛治の上多く住々ゆ刀なり 鞍中為三大隅ゆ

久國為四郎名其名天下又聞ゆ後鳥羽院鍛工を好ゆ招ひて院中又

震治あり〜〜とゝい久國を師範又召さる是蕃飛治の始めゆ鍛治の

系圖に新御所とゝい此院の御事にく御製の歌又い十七の菊を銘

〜弱人り能狂言の栗田口為馬之丞ゆ久國のゆなり鍛治ゆ池井とも

に小鍛治宗近ゆ右跡とつるい誤なり

右大臣為家宮雅ゆ山荘旧蹟 栗田村又あり和名抄 續古今集に見へゆり

二條殿と号を拾遺集序の作者 ○田村丸の別業日本後記に見へゆり 菅豊長亭 空花集に見へゆり 栗田寺

三代実録 ○栗田口寺 山槐記 芸又栗田口の旧蹟也

栗田宮舊跡 栗田院ともいふ 栗田村の小丸地名又圓覺寺とゝ

あり昔こゝ清和離宮の而地ゆ

弱い道場〜〜て額を圓覚と書〜〜弱人り

栗田口十禪師の辻の故事
著聞集云
一條院の時御秘蔵の鷹あり名めく
こうかひそれども
名いえざりそれど
鷹ゝ栗田口十
禪師の辻縁
ぞて自ら
人の云ふを
ぬすみて人と
付られそうる
いひそれよ下
ゐ給ふ人馬が
をりて此鷹を
云ふ迷拙ゝ但まず
名いえざりしとひてゐる

箱あり約此人をめして
名のらせそうに南殿の池
に魚集り泳
ひそうる鷹
ぬすみそれば
あいせて大内
鯉を取そう
名まふるも
取そうるを
帝其方
と問せた
まい給曰
此鷹ゝ
ミさご捕の
鷹ゝ先母の
ゆひとして後ゝ乃
義と付るものゝ
せば感感ありて伝法
國ゝ田園を賜ふる
拾接者ゝ取これそう

古今集物名　うきなをいよそめとのそのうへ幻雲のあいだに花葉よ　あやりち

此ものは水屋帝釋のようあるさの地くうろ絵よいきこるて素光寺とふ今は

ようしゐなりとくとくるいうもそれ雲のうへて栗田をあいまいらくふよるいで

圓覺寺そ佛ようの彦に花のちるをうそ　　彰考載

雨風もくふのたもとやのこしゐむ法れむ〜後よ花をちしく　　本参議雅有

拾芥抄よ糸えさいは白川と見へうり和糸白川の説よ叶へり

比丘尼坂　本名ゑびくに居て往来よ物乞〜所よ名は殘まり西を

こうのさ町とふ方ひあるうろう小側い南浅井ふて西こうのさ東こもの方あれども小側づく

して南側い谷川町なり。此こりのさらふい一切經谷金剛寺阿弥陀堂應仁の兵火よ燒〜とそ

法尊を荒の上よ安置せ〜不なり

日山神明宮

號上水　関原与市　**六軒町**　九体町　此間二町之与市之経九人討ま〜菩提のゐ石佛九体たて〜〜ふ其内三体い今あり石のふい栗田

ふ栗田紀尤のふる南禪寺紀るれ尤い栗田ら之栗田紀の方い花頂の墓之。南禪寺紀のふ

を打號く十八丁奥よ大日山とあり御石ちゆ卒物語　加茂川さつとうちまうり栗田

ふと日の岩の間を乳母う嬢とふ　口松坂へもの〜〜ふ〜い花之

松坂　**栗田口より日の岡へのぼる坂をふ**。卒物語　加茂川さつとうちまうり栗田

長明参集　ひくうこん狂式繋らむまとる風よ我まり坂の松なり〜は松

附言　背より彌の青既りゐ代の松坂ふ人と詠ひ〜る此式さ〜てふり其證ゐ某家

石藏室町殿御参宮紀記よ　應永三十一年十二月十四日

我もまゝ〜くりふあふ坂のふ　　松坂よもたゐ年くの御参宮よこ〜ち〜此不〜もゐ嵐の松れ名式あ〜い〜て

度毎の狂詞よあひぬるも彩蔦の去り〜〜むゐ不なり

若き狂ゐ代の花さく松坂をいく十廻まう紙て見へき

栗田山　ひのくさふ紙も紙と押へもゐ式逢坂いるけうまゐ

日岡嶺　此嶺の左りのらよ鏡ふ見へ蔦のむうふのふい東ゐまいは其うえらふ和日の出

出る石式細井〜て楽燒の　御道ゐ南東式さ〜て幼ゐえ式不の谷う

附言　明智光秀の居跡花内義久俊一ふ後のやぶれよのがと之ゐ秀吉坂尾吉晴よ命〜て是ゐ退

〜ふ後よ大津よ押ひく攝ふ〜〜後よ日の岡ふ〜〜ゐを刎ゐ其死よ後で詩歌あり

主仇有前白刃空　殺身曝尸　報君公

可憐晋國刺衣客　共感生涯一夢中

えく幼稚の命ハみ〜〜ふ後のあをとも結をひの岩のうち

山科　ふ科と不都て八十七村あり枕名所い。ふ科川。ふ科野。

青羽ふ　遂坂ふ此ふ寺ふ〜〜ふ。鏡山　月名あり。花ふ　御ゐよ。小栗栖

。槙雄ふ。四宮川。石田野　御ゐよ。小幡　共よ名不して山科の内之

古今　ふ科の青羽の澄れ者よ人の志式へく我意ゐやも　　不知濃人

日岡嶺
續古今
たゝ〜鷹の
そゝ乃
志ゝ原
狩くゝ
入日の
岡ゑ
きぐゝと
なゝく
ゐり
土御門院

天智天皇廟陵
即御廟所

新撰

山科の言羽の川のさよみ名及ばれて言ふ人の名をそ押りふ山科のこたゝみ里の秋の夕暮　家隆

同

ひとり人の名をそ押りふ山科のいたゝれ野の秋のゆふ暮　俊阿

雪ふりて寒るなる山科の陵村

天智天皇御廟　逢坂を御廟野より街道より三町斗り左へ入る森に小祠あり居皆落一石の水鏡云十月三日帝御馬よりて山科へおして林の中へてらせ給ひ御ぐしまゐらせ給ひ御皆の落しを浅からぬ事なり　此記未詳　云天子の崩後を殯殿とも

又記名の天字より見誤りつゝ誤りなるべし　日本紀に天皇十年十二月近江の宮に崩御とあり　今陵丘もなく毎年あれども道の辺に

山科の宮に崩御とあり　天皇の御陵は東西五町南北小九十間の辺れあり　此御廟

日本十陵の第一にして年暮荷花の役あり　延喜式諸陵寮近江大津宮

御宇天智天皇在山城国宇治郡兆域東西十四町南北十四町陵戸六烟。

山城志云陵戸六烟の内今一烟のみて嘉暦建武の兼の補任牒載せ給ふ　延喜式中務省条役凡十二月奉諸陵幣其役三議已上及非参議三位大政官宣之　云幣

とも何ぞ物をつゝみ給ふるかの如なり

一万葉集　天皇聖躬不豫時大后奉御歌一首

天の原ふりさけ見れば大王の御かゝいのちかなくてあれば

天皇崩御時童謡曰

ちよのうゝ鮒。鮒てい鮒。鮒てい鮒。あるゝ（水葱の下芹の下我あるゝ）

鏡山　見よりの三丁程東の蓮如上人塚の標石あり　陵村の西小あり　明日寺の縁の石碑　御廟にてきるなり

万葉集従山科御陵退散之時作歌　長歌

八とをとまく我大君のかゝとゝや御陵つくる山科のぞこの山よ高るいも　畧

此家にしれば御廟を建ふりあり　と見へたり

額田王

御陵村　御陵川　薮の下村　皆山科の内なり　明王寺　郷名なり　明小あり

安祥寺△　御廟の東にあり　元字釈書云洛城東寺の実恵上人の法弟恵運と云人義和天皇の系位師と同じく仁明天皇の代に入唐して日十記を身に帰れり　安祥寺　文徳実録云仁寿三年十月紀名虎真我業為奥五位文以山城宇佐郡栗田山建安祥寺　文徳天皇の母也　拾芥抄に安祥寺の五大虚空蔵大后所建とあり　所謂仁明帝の大后渡和帝の后也。伊勢物語安祥寺にてこゝとのもあり　尚国上に記を

了光山護国講寺　日蓮宗山科の宮とよめり

山科宮人康親王舊跡△　仁明天皇第二の皇子此所あり　歌に山科の宮とよめり

俊おいしまぜゆ四宮川原の地名あり　歌に御所の西の方なり　地名あり

○三代実録貞観元年又月七日出家入道あり。伊勢物語に禅師の御子と云ふ

安祥寺

伊勢物語

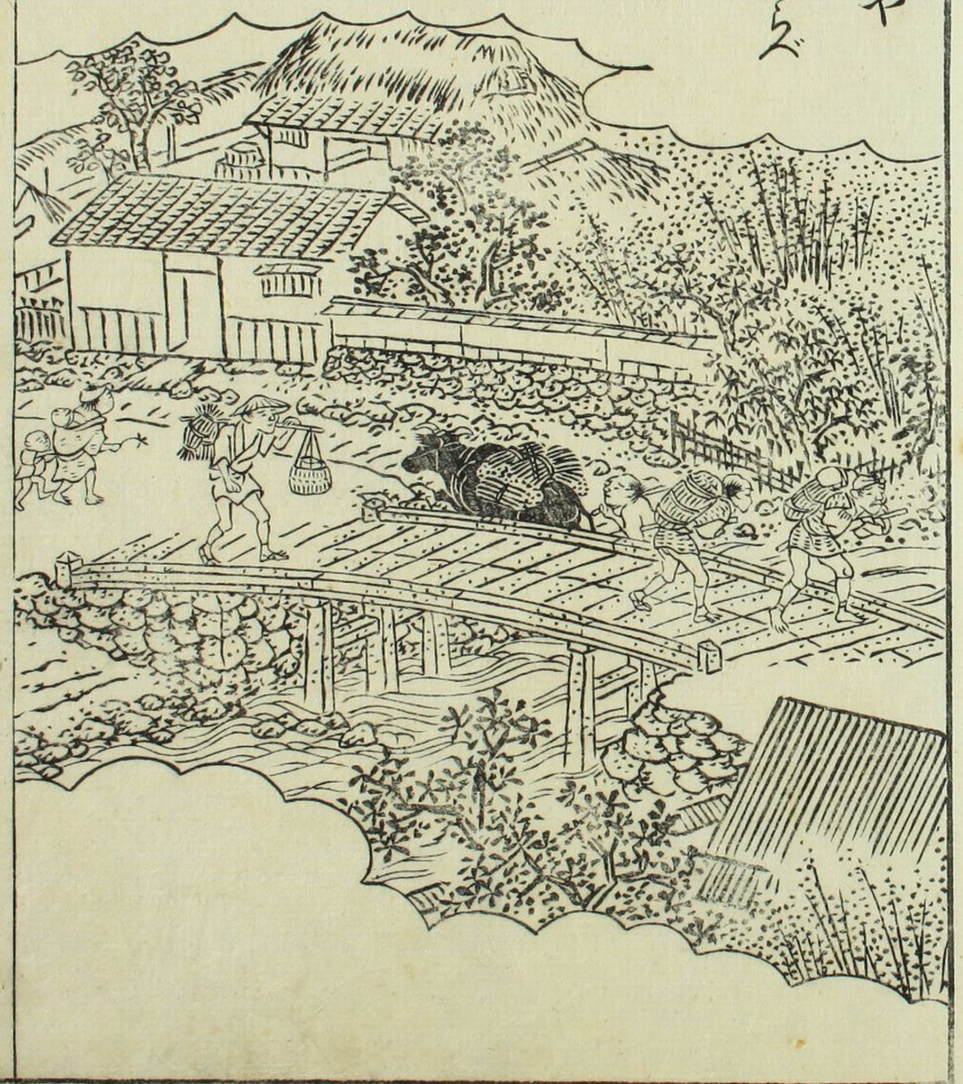
むかし田村の帝と
やをとめとおわし
ましける其時の女
御たちきこしめ
さまそうろうそれ
矣給ひて安祥寺
にてみまさしまさ
さげもの奉まくり
たてまつりあためる
ものを捧げたる
ありそこなくろ
さげものをま
の校に付て堂
北の方に立れ
ばとものさらう

四宮村
四宮川
巡地藏

京 雪玲

やぶへ
乃
あふこの

君や
そで
くらべ



親王の御ぶみ其文中「きのくよのみ里の渓よりあり名ゐと面白きなとてまるとりきゆ宮あるとき
こけをきざみこまさきよ此うきをつけてきりなる

ありしもいまはそうるろうんぬ心をうんせんようもみなれい　業平

後撰　たうるくてぶにうるようにこ科の宮の芝本とあ〜ま地を　三条右大臣

毘沙門堂御門跡△　奴茶屋△

諸羽明神△四宮明神とも云。名所の額に宗芝の筆こ宮の氏神なり〜
小山村の小祠なり御旅所の前のうちにあり　明暦中明正上皇
勅願を下し　たまひ今の堂を其所の遠さとろう△

十禅寺　宮村にあり本名聖観音徳ちなの市にて明暦中明正上皇

巡地蔵堂△六角堂踏傷にあり　俗に六地蔵とも

○愛裏記第六　西光法師の建立なり〜〜宮川〜小藤里〜西七条〜蓮華堂〜御菩
薩巡西坂本〜六神の地蔵菩薩を造り卒塔婆の上に石塔を構へ大悪の罪の報を
落なり〜〜地蔵と号ぶ云此西光ゆ法師の謀叛の心あり〜〜其子師経
共に誅せらるる中納言信西が見〜〜天文十八年九月廿九日に科ぬ大石の六地蔵を造り
供養せらるる〜〜天文これを中興せらる〜〜

四宮川　安祥寺村の宮川原　一名独の川原　源は三井の山中より出て小関村より
宮川原とゆ川下を堀川とゆ　廻り川原ゆ〜て宮を経て宮
小町家集　宮の宮と也ゆ〜〜ゆ〜〜て風ゆ〜〜　今の細き流とゆ〜〜

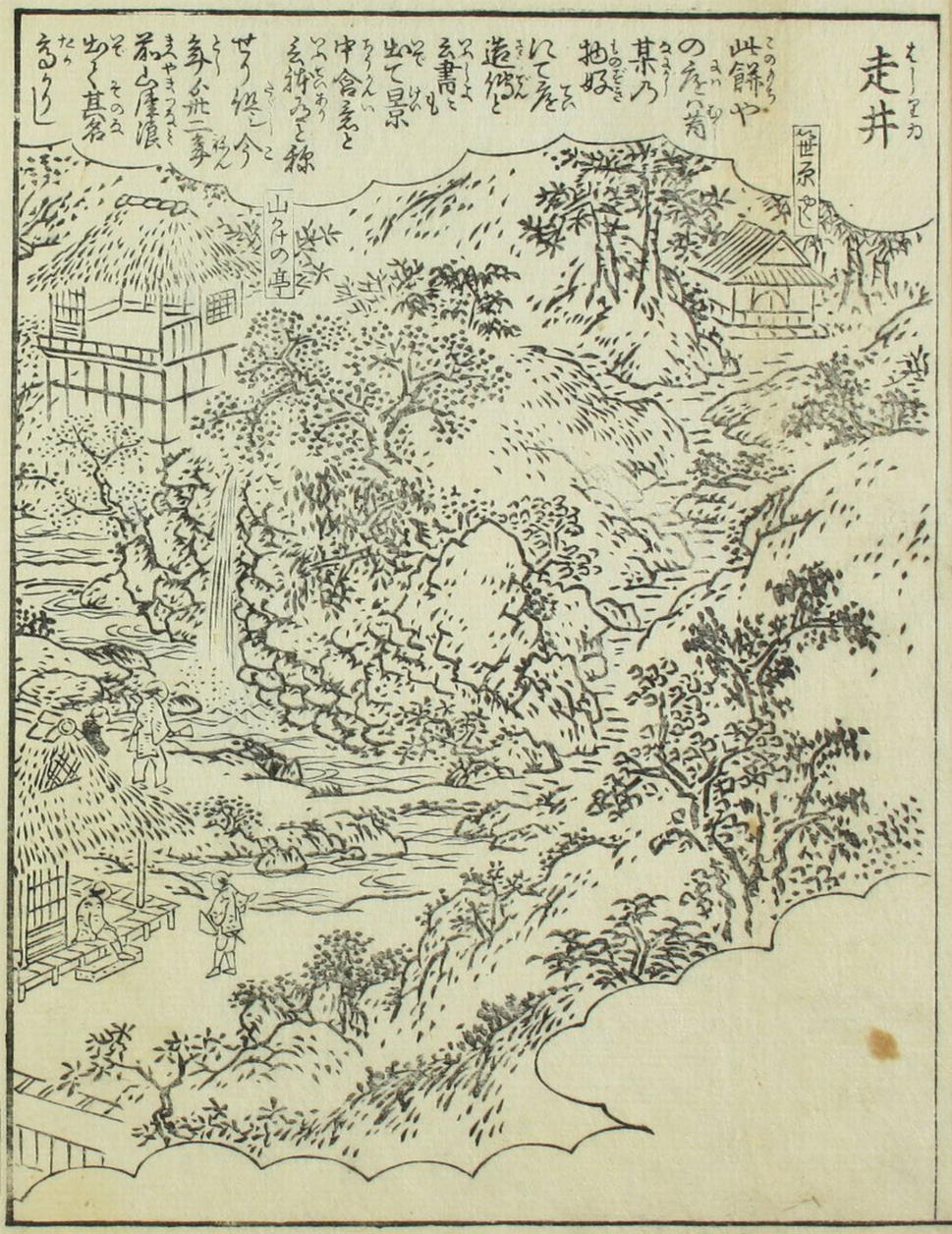
今知らるゆめ〜〜の宮ゆ秋風やゆ〜ゆ板もゆ〜〜しとゆ〜は

ゆ宮の宮とかくしてよろり小祠小町も仁明天和の法死〜〜ゆ〜〜いへども全く多月
も怪ゆ〜〜宮の名ゆこの宮宮体〜ませ〜ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜

ゆ独の川原ゆ〜ゆ〜ゆ〜

大津
追分

此石は国より来る人
宇治より又
京への別れ道なり
左り追分なり
是より東海道
坂とも又大津とも
いう札場の傍り
柳緑花紅の標
石あり是に添へ
る文
六地蔵後の辻
とうふ石よ標題るく
して文だうあり
この追分より大津駅中を
断つぎきたり針箱
大津絵などの店多し



此餅や
の産の菊
某の
拙好
して産を
造作と
云書も
出て景
中合云と
云伝へと称
せり然し今
年公班二年
前山崖浪
出く其名
なるべし

築山
去流を
て今のハ
其形をう
たせしとぞ
おろし
高木なども
其ハ余風もうへ
うう築山の上
に小亭あり是を
ふろけの亭とつ
内よふ野小町百歳
の像とて笑姿尺を
はなる老婆の像あり
石の高き不ハ
小堂あり毎
年師とつ
石佛なり

所名

走り井 今一里塚の餅屋にあり 第系集ものしるせり 其跡ありとも世にあたらざるべし 又世に不くよあるものゝ説ともこゝに抑て名るし

元浦

あふさかの関 いにしへ逢坂の関ひきこめる名ゆゑ

堀川左近左衛

清輝日記 康治元年条 ちゝ車よせてあふさかの関ひきこめるゆゑ

あふさかの関の水をはえてをゆきてはまた

堀川百首

逢坂のめけひの雫いまもなほ関の名ゆゑ

後成

所名

西国寺 虎関師錬 今 升やの滝 一宇石佛の薬師を安置と甚破壞して門もみゆ

みきりして戸をせり此石山城近江の国境なる山は西国なるゆゑ

所名

近江国滋賀郡 あをとしい 海のゆゑ湖あり 又そこ国の名 せり 天智帝志賀の里 郡 おいい白髭 是 細川のやうを限り西は長谷山比叡志賀山の麓を浪ゆる東は湖の水中あり

渾九社 社三所あり 又 是 細川の西 是 の系 の 郡志 ひとつ 比叡山 国 封せら 左 海 左 滋賀

逢坂山 南は城 北は青山 日本紀云 神功皇后 脇 三韓財の国を獲て還り 後 成

誉田天皇を 襲 崇 に 坐して 陵 延 せ 給 ひ 仲哀天皇の 別 殿 無熊王

是を 多 く 密 に 謀て曰 今 皇 皇后 皇 を 懷て 朕 陛 密 く 後 に 必 ず 幼 を 帝 に立て 我 に 敵 べ し 其 府 兄 を 以 て 皇 后 の 仇 を 横 刃 明 石 に 迎へ 淡 海 海 に 舟 を 連 し 毎 人 に 兵 を 帶 て 以 て 皇 后 紀 伊 に 結 て 宮 せ 皇 后 后 の 舟 を 紀 伊 の 海 に 泊 し 紀 伊 の 水 門 に 退 き 海 に 出 し 無 熊 王 又 山 城 の 兎 道 に 到 て 兵 を 結 皇 后 武 内 宿 禰 に 対 む 宿 禰 兎 治 川 の 小 丘 に 屯 して 三 軍 に 令 して 本 刀 を 佩 て 既 に 皇 后 の 命 と 誘 て 悉 く 捕 縛 め 各 儲 の 弦 を 絶 の 中 に 投 し て 君 王 に 従 へ べ し 願 くは 若 し 弦 を 絶 て 河 に 投 ぜ 武 内 此 に 抑 て 拯 国 を 乞 て 河 を 渡 て 兵 を 進 む 無 熊 歎 ふ 弦 を 得 ず 兵 を 曳 て 猶 く 退 く 武 内 是 を 追 て 逢 坂 に 遇 て 以 破 る 左 に 其 處 を 逢 坂 と 云

無熊王 逃 へ 去 き 不 く 終 に 湖 に 投 じ て 薨 じ 給 ふ 武 内 其 屍 を 探 れ 共 又 ゝ ぶ れ ば 故 て 曰

淡海海

あふさかの関舊跡 日本紀 延暦十三年 桓武 慶 近江国 相坂関 割 慣 とい ふ 又 云 其 始 て 置 く 所 未 詳 日本孝徳大化二年 関塞防人を置 と あ る 若 崎 始 し た

やとの原氏もいふ。拾芥抄に三関の名あり 其の 近 方 に 逢 坂 も 鈴 中 相 坂 も 東国西国の往人 征馬 を 留 ざ る 所 く 都 近 き 所 て 往 来 も て 知 ふ き 国 候 の

武内宿禰
悪鬼王と
逢坂ふよ
戦ふ

逢坂山
一名を向山
手向といひく往背
旅行人ゑらびぐ山の
景そ絵葉いろく
の紙をぬさとして
ほ方へちらしを祖
神へを向しゝ
其手向ハ山
山を向ぐるこ
ハあゝね去
都より出て
ちゞさしく
新景あれが
必此所ゝ
を向せゝ
を向山の名も

あり方ハ景を今タフ
ゲとふる則ちむけの
博語ちり 繋沖
説
後撰集 哀四
名ゐ
物ち
あふ坂
ふ九
さ稼ぐ
人う
ち
ふ
ち
ゐる
あふさうふの歌数を
あまどゝも暗を

地名などは人もよく知て古歌も多し。関屋の跡い此ところとしてみしかども大津の市中にあり。詳。昔の関は国境なれば関戸関津ともいふ

あふ坂の関　まちき拙なし　若狭とめよ　雑波

源氏関屋巻に　関ちのさもしやまもりはあらじなるく若狭とめよ

みて此関をこそ　蟬の羽の

この府も関屋もなるまもりもなく　蟬の常陸より

名所

関清水　岩清水　今八幡の蟬丸の社内にあれども長明発名抄にその所

既に水を出すよし見えたれば今さざらにて出るもなるべきもどされども八幡

明神系の所を関寺清水所とへば此所とは

故事

若ぐ代にあふ坂山に岩清水こころ人をとるとなひけれる那　忠岑

此歌にて見るべし。蟬丸ある岩間をとより流出るなるべし

拾遺抄延喜の御屏風の歌。新の集に八月弱逢と出流

逢坂は関の清水に影見てし今やひくらん望月の駒　貫之

名所

関の小川　又関川とも

金葉　青羽山紅葉ちるし相坂の関の小川ゆ紅葉ながれる　俊頼

新千載

故事

関守神　誠て後拾遺にあふ坂の関も神やゆるさざらん　さぬき

今山上に蟬丸宮二座東西に有　中興後の事なるべし

神とも蟬丸と名付しかを来の和歌なるべし　右上下にみしかたい

秀吉連歌の懐書に昔関不ごとく神祠を置て市に市

姫の神撥に橋姫の神を祭るなどと東鑑八幡の白川関

の明神に奉幣とあるも関守神にて今も関戸明神とて不祠なるもみな

○小田原陣中に秀吉朱武小系氏政を責る時大津上の関の明神にて天下祈祷の

連歌百韻ありて年紀を天正十八年六月十八日地を人法蟬正少弼長政

連歌発句　改めくる紙むもちひよ祝ごとく　紹巴

さげ紙に法つくく　清正

花ちまはあらしの風に吹こそ　昌叱

霞ふるひをあけうれそ

帰雁　戸枕のうへに夢をもとう

うけを　後に　ひくき秋月

故事

駒迎　駒牽　むかしは毎年八月十又日に諸国の御牧のるを天子へ貢

奉るとてあふ坂の関を来る所左馬寮右馬寮の官人此所に　むかへて

関大明神
蟬丸宮

牽をゑんとして逢坂のゆふつけをる

なり十七日ゑ甲斐猿坂廿日武蔵小野廿三日信濃善光寺廿八日上野ゑ尚国上ゑ迄を

牧しの玉ゑ諸国へ行て馬を飼むそし

其国ゑ甲斐武蔵信濃上野

あふさかの関ゆふつけをるとは

ゆふつけをるとは夕の中さいけき時に焼の煙りて物やはさせ給ふゑ結ゑゆふをつけに方

の関ゑいふて物ゑゑ逢坂ゑ東一方の関ゑばかりよろゑ

大和物語

なげみそゞゆふつけをるかゝ

龍田ゑ大和界の関なりさゑ逢坂ゑ

あの紡田西ハ穴生なり

○に方の関ハ東ハ逢坂ゑ有乳

関大明神蟬丸宮

なり九月廿日又此社へ遷御あり是神ゑ九月廿日迄廿一日ゑ清ゑ明神と九

ゑ国観音尚ゑ蓮如上人の名号石あり庵ゑ善光院友の跡あり蟬丸の琵琶ゑ

関清水蟬丸宮

此宮ハ昔の関寺明神ゑ今ゑ三井寺別不の内近松寺中ゑ

拝殿の柱ゑ表して云　関清水蟬丸宮醍醐天皇弟四皇子日本國中説経讃語

勧化師者曲藝者等ゑ祖神也　右等之者之免狀當本社出之也　○関清水涌出

源在本社拝殿之前　○小野小町庵室在本社少北西云　○小町姿見石在本社左

祭礼の日ハ蟬丸蜀紅錦の御衣ゑ長刀金装模刀を

逢坂駒迎

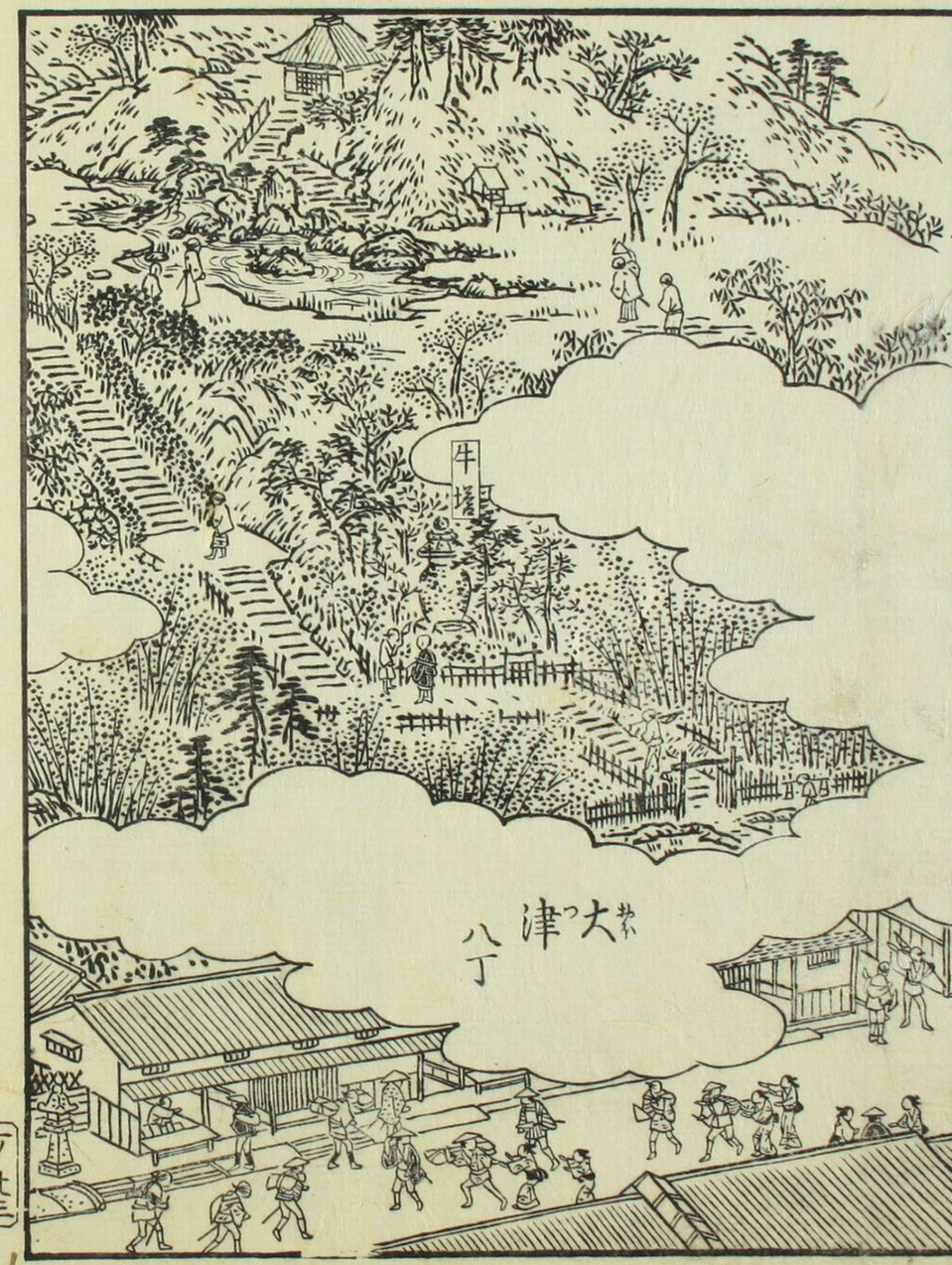
拾遺
あふさかの関の清水に
かげをとめ今や
ひくらん
望月の駒 貫之

逢坂のせゝの
岩うど
ふゝなゝ
ふゝち出る
きり
ゝ九月
大山田之遠

公事根源云
久しい信濃の勅有
牧の馬奉る六十
疋勅有の根笹也
式に云
九十貢八疋
代りの黒毛

院の御園に
あるにより十
六日になる天皇
南殿に出御なりて五馬
を御覧ぜ上々御馬の解
文國馬の選ばれを奏をとり
呆て公々以下次第に
をたまる馬のさ
つををゝりて御前
みをてゝ一拜す
取のにし御馬を引
野供とて
次第をりて院
東宮をどもろ
ゑべきわゝへ
まつる下略

長安寺
関寺
関清水
蟬丸宮
蟬丸宮
小町菴
天神
蟬丸宮

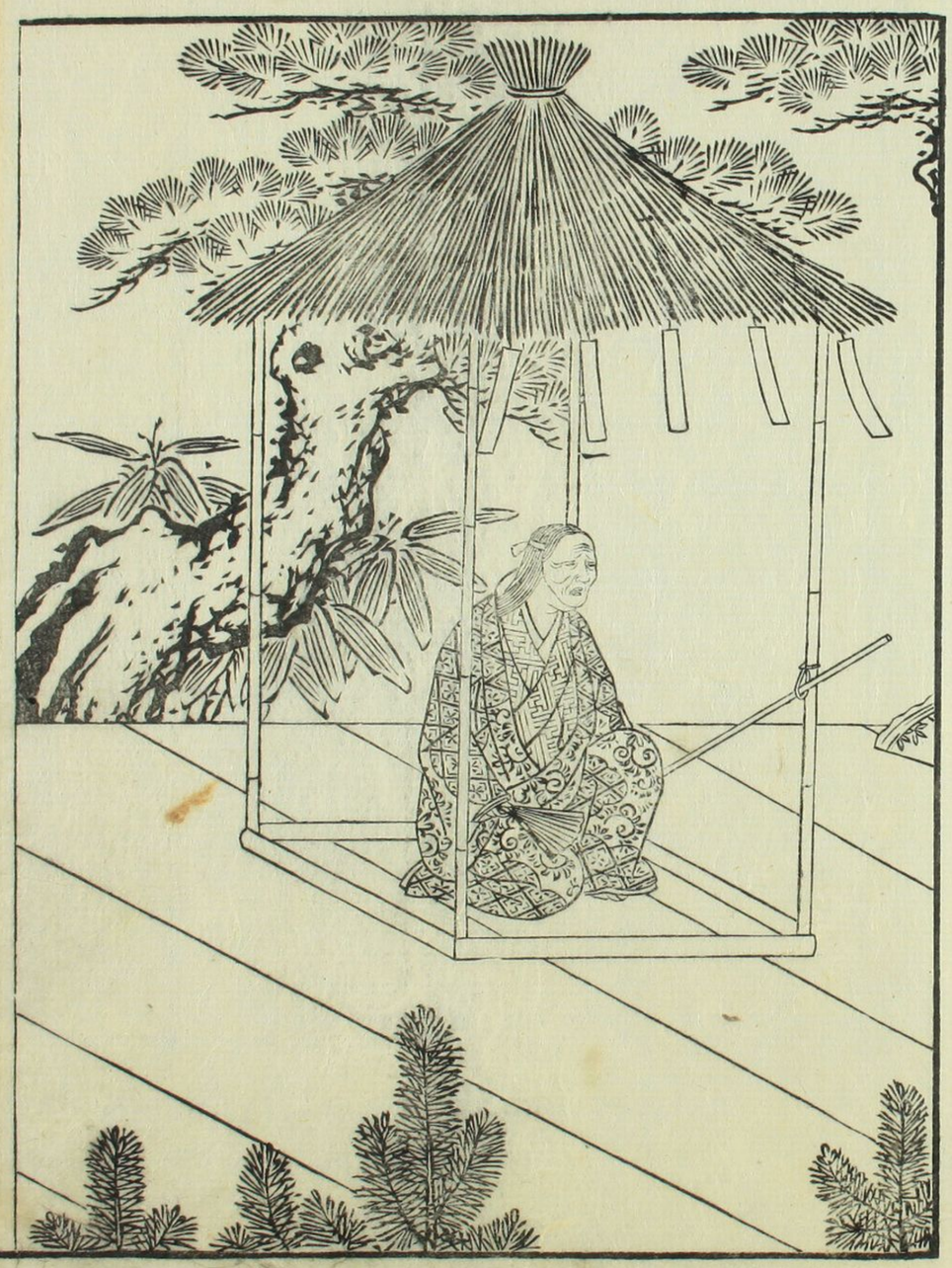

牛塔
大津
八丁

そら祢く渡御ある其先驅のゐ〳〵て國〳〵の說教流の者黑き塗板ゑ其國郡姓名氏記〳〵て持げ行きれを說教者の札と

又按るに此說數說ありえ今の俗氏傳の如き者にてそれ〳〵に經文又は偈が中世ふく〳〵ある文又節とつけ〳〵平家物語ゑ清曲者のごく〳〵ありて其曲節今よのうりて淨瑠璃義太夫ぶし〳〵るどの中へ入〳〵憂苦のあつれを僧さ〳〵むる曲なり。又琴又ぶし〳〵とくるあり〳〵これも祇佛板人をまつる又其音紙ふ〳〵つかの琴文ぶし〳〵りゑ〳〵しものなり今三絃ゑて琴又琴〳〵ゑ琴又ぶし〳〵ゑ必ずまるとふ頃紙ゑ揚板とあり〳〵ゑてゑるべし

○蟬丸い延喜帝第四の皇子なりとい源の親行東関記行にもさいつり拙きども其證るきゝて書くれも先を論じて異說多し〳〵又今昔物語にい宇田法皇の御ふ敷奠親王の雜式ゑ〳〵もつくりゑふ姓氏もえぬ人なれが此說い信ゑべし〳〵又今昔物語ゑ博雅三位とゐひる人ゑ未明とゐやの因つぶきる法師ゑ琵琶い習ひゐひよりゑ〳〵云此盲人ゑ混じて蟬丸も盲人とゐひ紙べし〳〵といひえゑうゆゑ〳〵の人を見ん〳〵とゐて来るべし〳〵蟬丸を延喜帝の御子とゐ分て水戸學士の一說あり先又信ゑ〳〵べし〳〵耶尤ゑ記を

○唐南朝元帝の諱を延基とゐう延基の三男嶽の府ゑう庭ゑて其上聲これが通ゑ是を相國とゐ不ゐ棄給ひけるの名紙蟬丸ゑ延基の名紙ゑ名付〳〵今ゑ此ゑ〳〵ゑて日本の蟬丸の子と考るゑ延喜と延基とキの字の音同〳〵蟬字



関寺小町

関寺小町の後も歌舞秘中の秘をうけして其人うあらざれば是をよろく近江雲上紀家會喜安

ひもとかず

と禪ノ字と形おなじうして相國と相坂關もおなじ様なるもむかしの人唐のえ帝の故事のさうに拙公日本のものと見あやまりたるなるべし 謡曲のうちに古史考巻三十にまたうつして拙集仙家集の中に嵯峨の御門の御男の名ありて知恵の人なりとあり 知恵のうち糸竹を好んで大官人なりしまでは後撰集にしるしてあり 扨この関のかたうみ彦紙ちかくしひ紙来の人のなさしけおよう毒命をつゞきしとあり

○按るに[illegible]の仮名書い唐の故事なる小説などを採りて作りたるものなるべし 後漢西南夷傳に三節の天竹を流星の沢にて其中に一男児あり保てこれを養ふ人此故事をもとにして作りたるなるべし 禪丸のものもさるべきなるべし

関寺 古の実なるい三井寺五別所近松寺の内之近松寺も大寺みな坊舎も数多あり[illegible]流れて来る法圓寺の来らじ[illegible]本尊の観世音[illegible]

長安寺 元関寺の跡なりと云 仏寺松[illegible]

なり 別せ寺は関寺の右図あり寺内は右の[illegible]も[illegible]きたるなるべし 小町百歳の木像あり 小野小町年老て関寺の辺に住りしとつふ其所の談

このれなり我身のたそやあさみどりつゆ[illegible]の露とちるべ

は芭蕉の句書なるもとく

終るまで身をはみそとおもひそれ[illegible]ちるの人の世送り

或云小町関寺に住て身の書ふもろ[illegible]関寺小町とつゝ謡曲い小町はるゞ[illegible]人世の盛衰をさとさしめんがためなる仏者の寓言なるべし

○

牛塔 関寺長安寺の前にあり右図にしる 又竜の石塔なれども今は一重残るのみ 沈海志に 此塔を霜牛塔あるひは迦

葉塔ともつくり 慶長の乱より廃して今まのあたりのもとくるし其塔中より掘出しなる佛舎利をもて近松寺のものとぞ出図上にしるべし

○**関寺**多い 或云長安寺の名ともいふ 関寺の関ちとのひしく大伽藍を近松ちの迄[illegible]

の関ちとのひしく大伽藍を近松ちの迄[illegible]

れが今西の禪丸の宮のうしろ[illegible]

の四地とも[illegible]

[illegible]

近松坊 西本願寺掛所 蓮如上人の御母長祿の法華中より御願依の余り

日華門を大谷御坊へ賜ふ[illegible]

[illegible]大谷紙焼拂ふ其所上人新像紙蔵ふ包[illegible]

安寺紙[illegible]と[illegible]新像と芸ふ近松ふ[illegible]

分附せらる上人[illegible]諸国経歴[illegible]

地なり 一説に伯父の御坊多徳流[illegible]

文明十一年正月朔日 雷

たゝたま紙芸ふ[illegible]

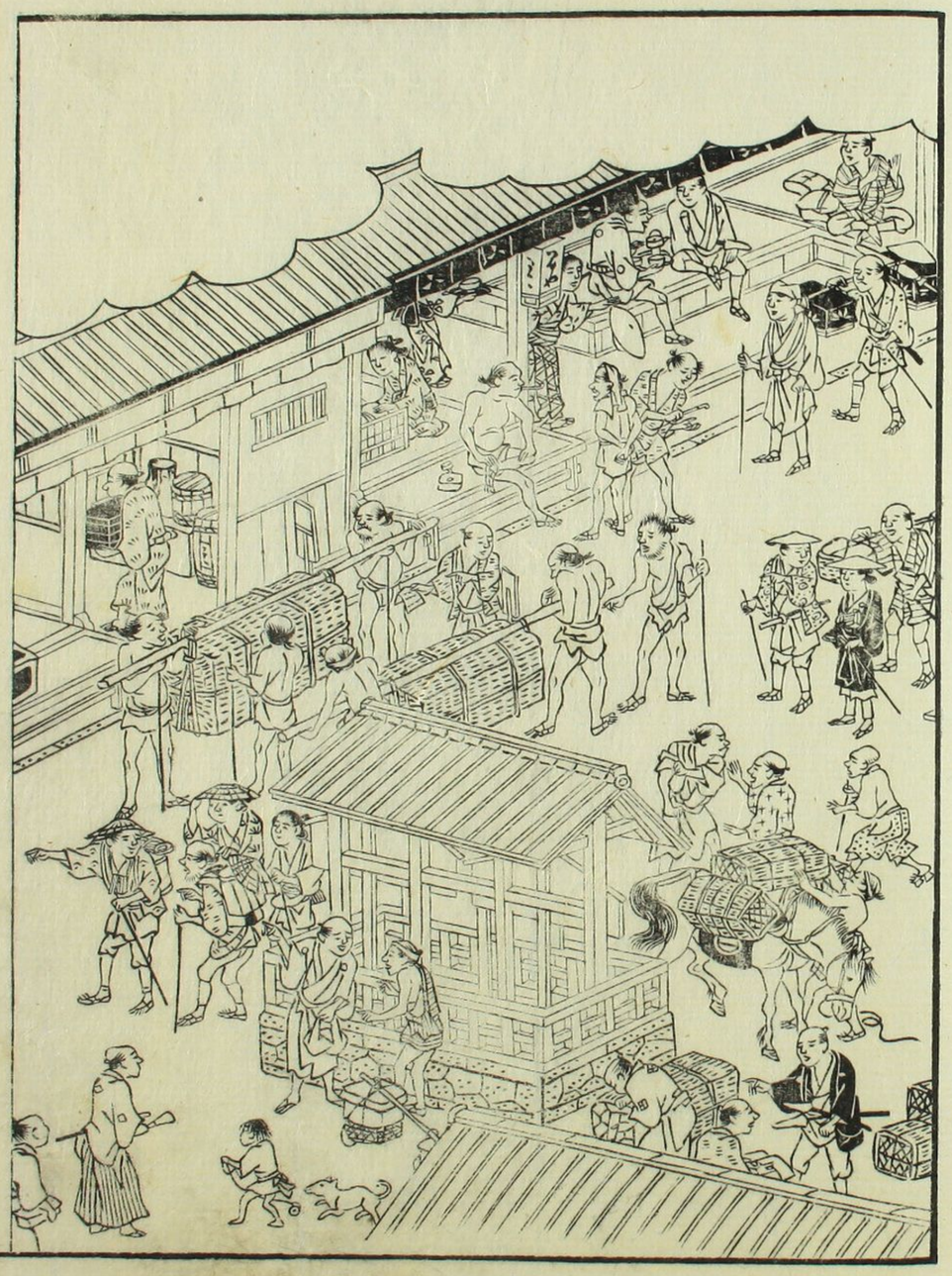
蓮如

関寺 牛佛

栄花物語巻の月の巻に万寿二年五月
日 此比きけい寺坂のあなさ関寺とゝ
石に牛佛あらはれゐたりとゝ京の人
〻参り見なり参ごろ此まゝ大なる御
堂を建給勅を仰りもよおすりゝるふ
えもいまゝぬ大木ゝも唯一牛一つして
そこびとるものをゝ〻り中略寺社あ
うに成む人此牛ゆりて四日を
我もゝにふ佛なり此まの佛
を仰せ堂を建させんとて年
ごろとるふそあれ人いくそ
うたうふゝ見と見へうゝ〻中略
つゝ稱ゝも彩ゝるゝゆもたく
きこの牛の心ゝ見ても仰ゝ〻
つゝ屋をこゝゆもすりて世の中
よおいゝ〻人参れぬゝる
く中略唯帝東宮宮〻ぞ
見ゆゝ〻まゝぶ見〻ゝこの
牛佛ゝち拝ゝげよおい
ゝ〻れ参中略聖絵
像を画んゝて急ぎ

〻中略いゝ〻人ゝも
参ゝむ人もあゝ
関ゝゝ
牛よゝ紙
うけゝゝ
ゝ参ゝ紙
あふゝゝ
の関
人ゝあまゝ侍ゆれど
日ゝゝゆれがゝど日仏
此御形を画せゝ六月
二日ゝ市服入ゝゝ
〻ゝ程ゝ其日あゝて
此御堂ゝ牛三ゝび
めゝりあゝきゝゝりの
石ゝゆゝ参ゝやゝく
ゝ〻ゝ中略ゝゝゝ
其石ゝゝゝゝ佛
ゝゝゝゝゝゝ
形ゝ内ゝも宮ゝも辞ませ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
かせゝゝゝゝゝゝ

大津八丁
札之辻
其角
み観の馬も
せいしゃ
くれ者



大津

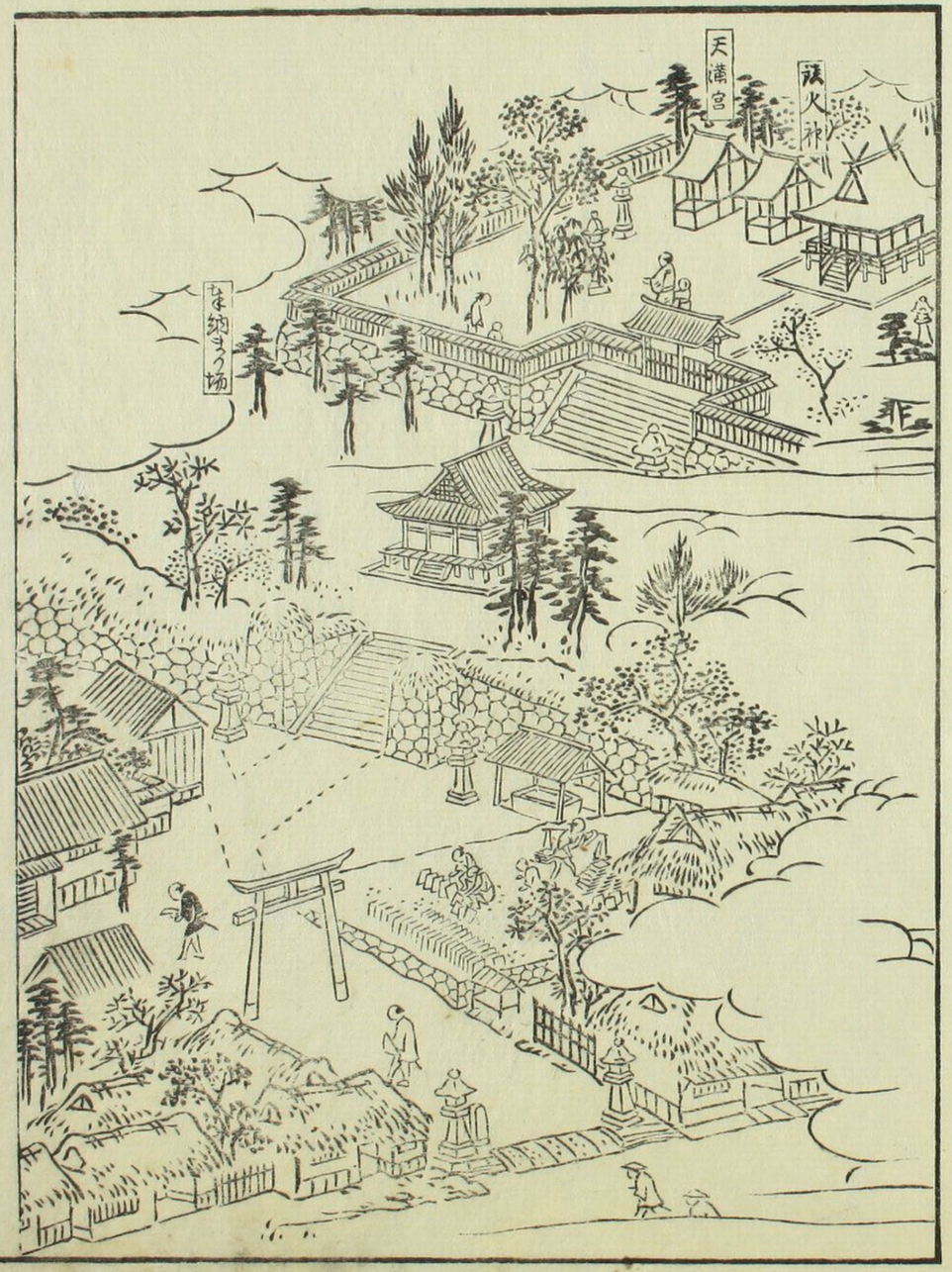
日の宮祭引山

九月九日十日

西行橋町
源氏山中ノ町
折水山中ノ町
西王母町
龍門滝町
神樂堂田町
石橋
猩々南保町
西の宮町　湯立町
神功皇后
月宮殿上京町
殺生石柳町
郭巨
都合十四番名金玉を漆
を飾り錦綾織の帷
幕を張て本偶機関の
巧みを尽しとぶく弟子
紙子幸月を奏し

遠物荷ひ物

造花町　汐汲町
獅子八幡　乾光峯入町
道祖神　鉾小屋町
御供所　唐子町
八月十六日御輿拂ひ
に付其日引山園
并百石町より紙子
御輿を出す
九月七日　山飾
九月十六日　御輿洗


天満宮
諏火神
お納まり場

まつりとの中ろ
松本社
ちくくくのしんや
跳鞠神社
常世神
本社
大津
しのくるの中ろ
印宮社
庚申
本社

霊治八年 此日 六方のむ免が香 竺一換校

其後山科真影堂成就してうたし奉らんとせしに三井寺乃
衆徒是を拒んで真影を帰さざりしかひく上人筆家の御
影を写して新像を作り給ふ此後山科焼亡し
てより影像紛失しぬ今京西本願寺の尊影是なり小関
甲水車のうへ六条ちかくなる也日野俗の母なりと云経の名号ハ
を松寺ハ毎年七月廿四日千部佛とゝもに拙稿せらるゝ

大津里 湖海志ハ町数九十八町人家四千餘軒四道の襟喉にして
人馬牛車をかて洛中へ運送とる事不絶馬を大津馬と称
にもよりて各逢坂と称ず称ず程ちかく車のたくみなるもなく
やりつけとうと 舉白集にも書とり

関こえく 義経記ハ此所を大津の関ぬけさしこうり 降祐
秋の日もなかくれぬとの紅葉はく大津の関ぬけさしこうり 為家

大津の名ハ天智天皇の都より此所へ遷幸ありし此里ハ坂本の城
此地へ引けしとぞ町家も若干ありし町の名ハ坂本と同名あり

札辻 京町札の辻より南へ行町之 嫁辻 今宮廳の西なり 京極寺相国寺相国寺の西なり 石畳 水中より出る大岡の時代
南の入口より札の辻までを八丁とも

打出浜 これを打出の浜とも云ハ相坂と称ず称ず湖水なり 始めて入海なる所を
つゝとぞ 四方の浦より打出てこれが白妙のふじのうらと称じ云ふ也 ○平家物語ハ
本曾ハ都より下り今ハ都より上る大津のうちでの浜より紀逢
右のものの名ハ紀通り松本の浜辺へ出れば紀を打出の浜とも
第五十三段参
あふ坂をうち出くれが近江の海を波立て浪立て
拾遺巻五 凌人丸

四宮明神 其地の通りを大津四宮とも 祭神未詳 名月抄云ハ法列刻とる神社 俗説ハ神社 貞享本殿 ○秘密ハ今ハ絶えて四宮の神官總政不の儀ハ絶る中古伴の式紀てより
関本殿 ○秘密ハ今ハ絶えて四宮の社中ハ要の恵とも云ふ 関本とハ宮の社中ハ要の恵とも云ふ
とハ別ハ中来の前あり ○山王祭礼ハ明三日ハ大神宮ハ渡御あり 帝日ハ神輿
松本村松本社 ○弊鞭の神 不宗猿田彦神 大右ハ城国桂宮ハ在て 後者
羽院上皇鞭使をこの神ハ彩用ず 兼元のもて免勅して此松本
国ハ遷座あり 座を無史の後今の地ハ遷しまる 即龍者ハ雖
波の為家より

蹴鞠精神

著間集

侍従大納言成道の卿は蹴鞠のみちに心ざし深く古今の妙をふてで却て一生の或夜棚を置不の鞠来てまろび落来りぬと思ふ程なく影の人ふて手足身は猿丸に似て三位殿の小児なる者三人をづゝ鞠のなやをとりて行者ぞと問給ひ給れば我は鞠の精昔より鞠を好せ給ふ人いまだ却て一生まさず

やべきなりて
紅ゆうゝ
眉はかゝるる
髪とれよさ
ほこ一人が額
春陽花
の字なり
又一人を
夏安林又一人を
秋園の字なり
今ゝ君御鞠好ませ
給ふ代の國家一宮僧
命ゝ御鞠
の時はゝ
本づひる糸りて宮づ
仕り御奇りとぬ糸ぜん
とゝ思ひど其家は人を
ちりぬされば鞠を交る
ことば紙の額の絵を

石塲

旅ようの序
る人と迎へ
て夏を煙を
を今酒迎
といつくも見
いたへよりあり坂
まを出て迎へうる
のうれば坂もひ
もまうべしそ
又云日本紀非功
皇后紀舉鰒以
壽下太子云云
按るにホカヒと祝ま
て酒祝也されば海
老と祝ぶの夏ま
ほ酒祝の略ど
うてるみべし

拾遺の社ありて祢宜八月七日〇旧記日大津松本村平野大明神ありて諸社仁徳天皇ゑそまつ〜〜東大津松本馬場の叢祠ありて此祭礼は月朔日本宮山七町目の山に孤谷と云あり〜を

常の社 倭の小祠く此祢宜社へ入ゆ〜〜〇社伝云此祢宜は池

茂宮の祖祢宜なれば旧者ふまよ氏ありて今この宮名よも遠ふ〇社伝云此祢宜は池祢宜の供奉して彼ふ湖水の渡船をそ〜めなりひ祢宜とぞ〜の頃世の祢宜も出

天満宮

猿史祢

附言 二座とも丸松樹

著聞集

鞠は天武天皇大宝元年よ此頃始りなると云鞠を蹴るよハヤクハ

さて侍従大納言藤原のなりもの鞠の蹴の額の名ありもあるなりなりそ

つるとらひ仲〜武蔵守清盛の弟基宗の仕業よいあるべ不思議なりなりの多

西へ蹴てうらもそれバつる者貝殻ぐらし」なりるとぞ甚へ余名人ぞ」畧之

りろこ川 ゑ細下の守ゑ社石塔云べし

石塔 橋の渡〜永世石ゑ琵琶湖眺望の住境系宮人の酒迎など僧を茶屋

あり。猟師ゑど多〜遠見焼竜あり湖魚鯉鮒鱒ゑ宮ぎの教をうる

義仲寺 馬場村よあり一茅庵ありて 洲崎師ありて祢宜

義仲塚 あり〜を天文北二年ある人栗津

の本曾冠祢宜〇一宇を建て義仲寺と〜義仲

今茅庵と名ゑ〜義仲寺死の地ゑ此辺りなるべし

〇義仲ゑ軍ハ清和源氏の後胤源の義賢の子ゑ小陸ゑ熟

屋〜〜〜時運ゑ終りて倉院の宣旨紙ゑ及んで朝真を紙並具利伽羅の二

戦をはじめ不〜の戦ひゑ初あり亜ゑ京師ゑ入く平族を西海ゑ追却く其勢ひ

破竹のごとく其功ゑよりて征夷大将軍ゑ補せらる潜武上洛の後頼朝ゑ日く以長

〜公卿を閑官〜庶民を饑寒を恐へ法皇の御所ゑ焼討を源教経鎌倉にあて

義仲の模倣をなして能盲義仲を[illegible]をねらうして攻めしむ義仲先を[illegible]治盛を迎へ戦ひ[illegible]も終に利なくして粟津の原に出ひて流矢に[illegible]て幸を[illegible]人のよく[illegible]ばかりなるを

○芭蕉塚　并に　祠堂　本像い當時其角去来をはじめ名匠方の門人是を営む其後天明年中翁八十回の忌を以て同藩蝶夢又改建る祠堂の内み人形三十六人を画き各毅白を書て堂内に掛る　翁の嗣子死去とき翁其死をうゝ[illegible]家の嗣子死去とき翁の遺髪を首にかけて[illegible]

芭蕉翁かしてはの雨をきく夜かな

花の雲鐘は上野か浅草か

と眼前の実景をのべ[illegible]を消し[illegible]

隠れうの[illegible]を行春ふるう那

風の吟[illegible]化して[illegible]風の師と仰ぐ其後[illegible]義へ仕り[illegible]

病床[illegible]

其年より大津服部の人のつかひ[illegible]石山の[illegible]庵み住して[illegible]て[illegible]ぶる年あり元来混本寺佛頂和尚み嗣法して[illegible]開禅の法師と[illegible]須广の後泊船深の名所[illegible]の庵に住つゝ

住たくな旅のうゝ海や秋かぜ

[illegible]の[illegible]も十餘年の間[illegible]奥の細道の記[illegible]其後伊賀の故郷に庵をかまへ三ケ月の[illegible]浪花に来りて住み[illegible]庵み[illegible]門人あり[illegible]を[illegible]命運を[illegible]

旅み病んで夢は枯野をかけまはる

[illegible]

本曾殿と谷中合せの墓さう那

[illegible]

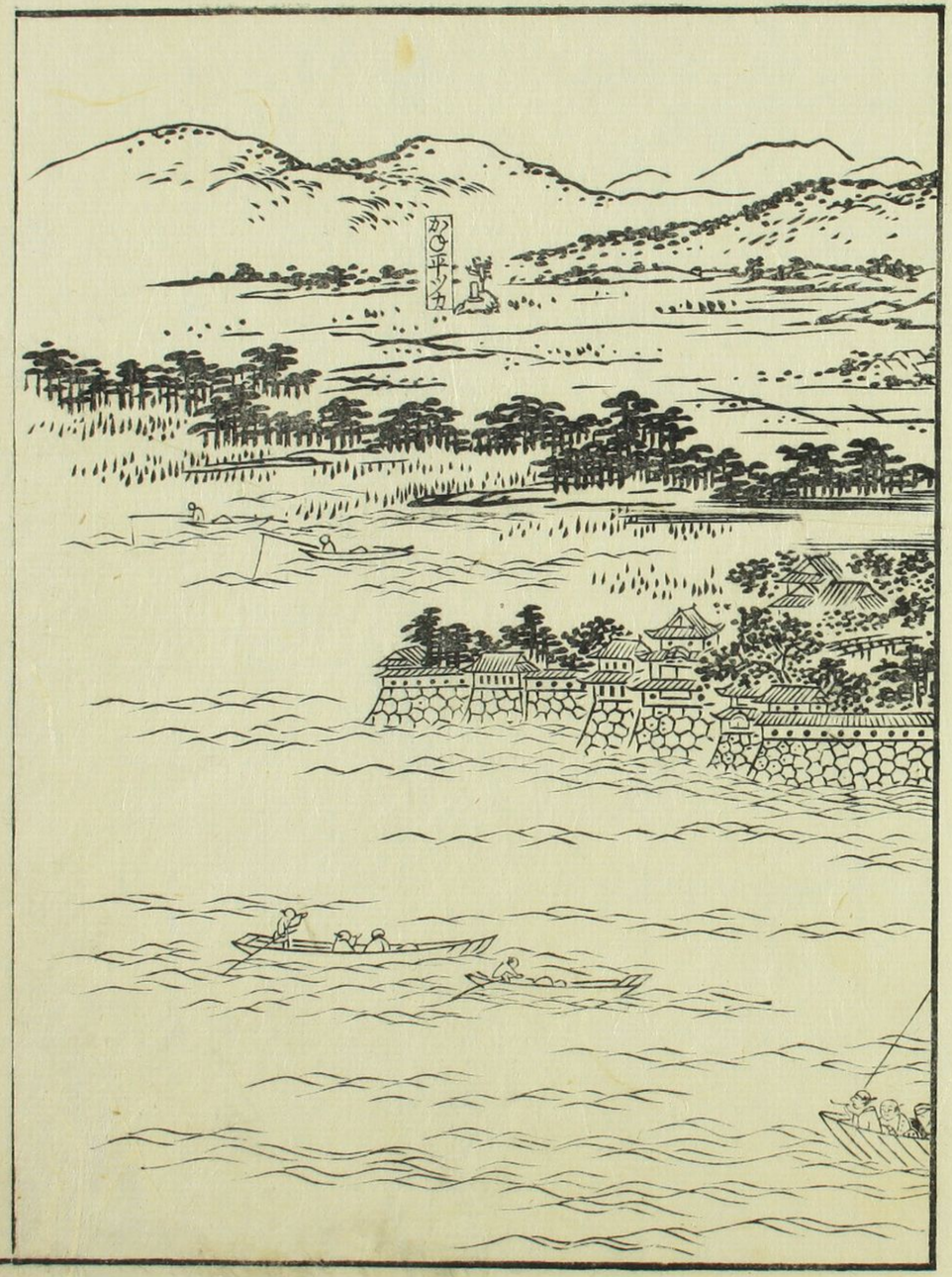
この川○馬場村○別保　園分寺なる　業師如来　○服所塾門

天満宮　此傍み北年[illegible]東武醫官吉田桃源院法印常

[illegible]待を構ふ　服部の城下なる本よりあり古[illegible]

八大龍王社　八の宮とつゝ[illegible]九月朔日　○八大龍神社

膳所
矢橋渡舟
膳所大明神
諏訪社
田島社


カゝゞ平ノ力

其二

山王祭礼の時
供御の料より
もて腊面の
所にて七日
前より
一場を
かへ
往来
の

人よさい
せんを
乞ふ

此にられを
腊面の猿と
云

膳所むら〳〵より日吉山王祭の神供を芸を加ふ膳所と云大国記に芸不記
太平記に是世も出り古へ此地に栗栖名産なり○膳所の城元い東坂本に有
て信長公明智日向守に是を攻られ焼亡す大国の沖代大津より橋〳〵系拾宰相高
次是を守る其後戸田某此地にうつり〳〵繁くなりぬ
おもの〳〵濱膳所の古名なり勢家名所膳の
拾遺神楽歌
濱と書也

たれい安元多中大掌會風俗近江の国に有りのこは沖膳のなりを云
膳所大明神　所祭大梵天　城の大なるに有り元三月三日前よりこれを栗津祭と云
城中に色を変ようつせり今城中に大なる桜を神本とす

栗津原　栗津祭　栗津
のりのもつ　今膳所の城下其田地にて膳所明神即其社の神なり
後拾遺
あり川堤をとろかれたるたのくめは　権僧都静園
そこのそこきのゆ説〳〵あり一説に此地一種の名産にもつべきものなれど
兼平寺　崇城沖善提寺縁心寺の境内にあり石塔道光大居士
兼平塚　兼平と記せり兼平塚も時平塚
栗津山王祠　兼平を田畠の宮と〳〵川原の濱に有り本縁未詳一説に田畠某又かげ
ろふ姫と〳〵に者ありて頼朝の感状なるに所此地に有り此地に有り供膳の
兼平を〳〵めとまつひ給へ今山祠を山王神と号の沖供物屋と云に似
〳〵尚安〳〵くいらず
祭りの系下に有り○かげらう丸池　社の前　○兜塚　街道の元田の中に其石塔を建
に有り

八幡社　社未社　膳所小路に有り義仲弟巴女を祭るとなり○五百羅漢
寺号開山縁起　○守る川　上のりろこの川と云も元い田名にして若栗津の
森をお城の辺に有る城川の流れ〳〵なり
兼平塚　膳所の松本より二町西田の往還に有る塚の塚あり膳所塚と是を建る
尚国上に記を

兼平が塚湖〳〵とかり田〳〵耶　鬼貫

鳥居川村　茶屋あり元り〳〵往勢に東海道勢田の橋に出る玉に紀石山に有りゆに其
次に石山まで〳〵流泉を

▲御霊社　三井寺の縁起に勢田合戦の皇子を祭る
▲芭蕉翁幻住庵四跡　石山の奥石間の後園に有り翁の記あり
凡俗文選猿蓑集に出る

▲あつまの薬師　夏天三年三月建立此寺中の石佛なり比叡の対焦童山石佛
実曲集石山に有り石佛あり〳〵の声を怒を加号けり〳〵云
石山に紀くむらん人の仏堂に有り〳〵やとて見をやをとめる　貞徳

▲螢谷　平名抜の谷〳〵に螢多し螢谷と尚画上に紀す　○夢浮橋　源氏の物語の
大きな石の螢に有る河と同じくして地名に有るべし。源氏物語に是のうき橋と標記

粟津合戦
今井四郎兼平いつさ
級るゝ及んで敗卒
又十騎を率ひ
義仲よゝぐを
あひ龍れが
先鋒一家
四郎を追
ぐを殺
義仲討れ
ぬ
その級
石田次
郎
曰これ足
の東国の
このゝ日本

一の剛の者自
害をすゝめ
ようて力の強
をつよ倉ゝ
馬ようさうさ
まふあをち
つぬゝ
て矢ろ
ろ
平家物語

へ出ゝうれと文中よ差のうれ指とつできる不るゝ宝弘卿のうう

去れ後の差乃うれそゝとでゝて差ゝまうゝ撰雲の宝

とよゝ治へるゝ兵差のゝ。按るみ丸ゝ〜いうきそゝ〜とのゝいひるゝ紙添語の縁

ある地るれが好ゝの人差ゝとゝ因紙添てようひるゝやあゝん其遠ハ

玉葉集ゝ寄融院石ゝよ却ゝ〜ます附九月廿日五上人もうき指ゝ不へまうゝて攻り

我ゝうしも沒ゝ石みい拙ゝきにいゝるゝ也ぬる杖丸ゝ〜ゝん

石光山石ゝ寺

勢田の南ゝ之如意輪観音ハ孔十三番札不用基い良辨僧公任

正天平勝宝二年草創元亨釋書曰聖武天皇東大寺と創造〜治い十六

良弟ゝ沒ゝ和尼金堂ゝ金剛羅王拉現ゝ今の資を行ゝ求ゝ〜む拉現羅中

如意輪観音の自在霊應の地ゝ紙不ゝ〜ゝ勢田ゝ一つのゝ師部

勢田ゝ却ゝ〜ゝ石ゝ寺ゝ大石ゝ寺ゝ再び不ゝ僧正ゝ其ゝ石ゝ寺ゝ

佐良明神ゝ此地観音の霊區ゝ若ゝ〜て拙備を日ゝ〜〜奥ゝ〜ゝ黄金紙献ゝ

弘法武都感感ゝ〜〜てゝ石ゝ寺紙走ゝ又其地基をゝ寺ゝ天の堂釋

ゝ〜ゝうゝまれゝうゝて人蓋霊場ゝるゝ〜ゝ今ゝ〜ゝ像ゝ大石の上ゝ座ゝ〜なゝひ

堂ゝ〜ゝ〜ゝ

此寺ゝ伝記ゝ名亜石貌ゝ〜て好古人基ゝと寺ゝ又人ゝ蓋ゝ

本堂

如意輪観世音菩薩御長丈六仏像ゝ〜ゝ奥ゝ菩薩の御俗

御胸の間ゝ六寸の小像を納む是聖德太子の御俗服ゝ三ゝ義王拉現

執金剛神ゝ〜ゝ御長八尺大堂法安仏若御息女豊臣

祖師堂

弘法大師の像良弟僧正像内供淳祐像三高祖と安蓋

を○三十八所明神の小祠岩の上ゝたてゝ

○毘沙門堂左内院ゝ〜ゝて源頼朝建立○札堂如意輪観音

ゝ〜ゝ伊特語伊特冊盤余立尊の三神を祭ゝるゝ〜ゝ

本地乃軍地蔵ゝ○閻伽井○鐘楼○寶庫○白鼠彩向石坂の下ゝあり○多宝塔

○源氏間内ゝ本堂の河海抄ゝ云西宮左大臣安和二年右宰の検帳ゝ左遷せゝ

ゝ治ひ〜ゝ〜ゝば義武部ゝさゝ〜ゝ〜ゝ〜

橘谷堂

小い勢田の橋
南い供御の流
まで九二十八町
が其ろよ祥里
飛ぶ十おろ
衆星の光まど
聚りてろ
人あ水上人多の
初までもいく
白玉のごと芒種
の後ま日よりろ夏至
の後ま日よいろ
九十ま日のろ八盛り
ちろ夏至とど
く小暑の名ろれば
川人ごろ沿ど
のろ蛍ん蛍合戦と

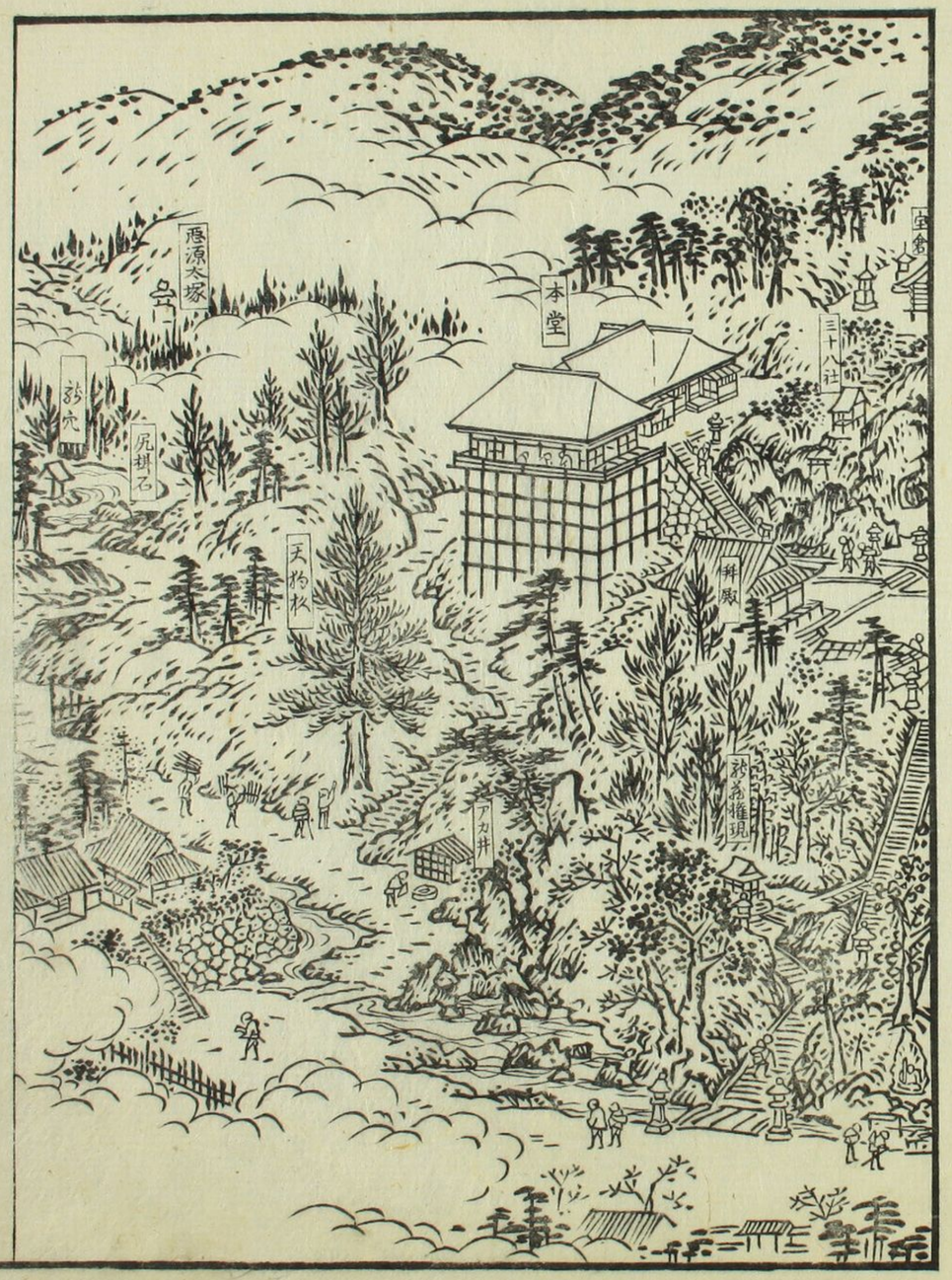
富士谷成章

うろこ
ろ多
蛍と
ろて
ろひ
くれぬ
谷れ
ろけ
くと

石山寺草創地
基平均時五尺
寶鐸獲土中

とゝ〳〵生〳〵とゝ
ゝゞ〳〵ゝゝ年納〳〵久る今ゝ彼寺ゝあり云云
後ゝ罪障懺悔のゝゝ般若一部六百巻を
玄書云源氏物語い児女ゝの口ゝ唱ふるりのなれゝ又学ゞ〳〵くやゝ〳〵いゝ〳〵絵え
ゞ〳〵文筆ゝ紙の物ゝ〳〵ゝ儒学史漢の書此物ゝ〳〵其ゝ如ゝ歩ひゝくゝも和漢女のゝ人ゝて芸ゞ右ゝ出る
ものゝ〳〵天然一心三観の血脈をつゞ日本紀をよゝ〳〵ゝそゝ足ゝうゝそれゝて日本紀の局ゝも云
ゝゝ又いゝゝ石ゝ〳〵ゝ経ゝの裏ゝ須ゝ〳〵ゝ〳〵ゝのゝゝゝ

石山寺門前


厄源大塚
本堂
三十八社
妙穴
尻掛石
天狗松
拝殿
力井

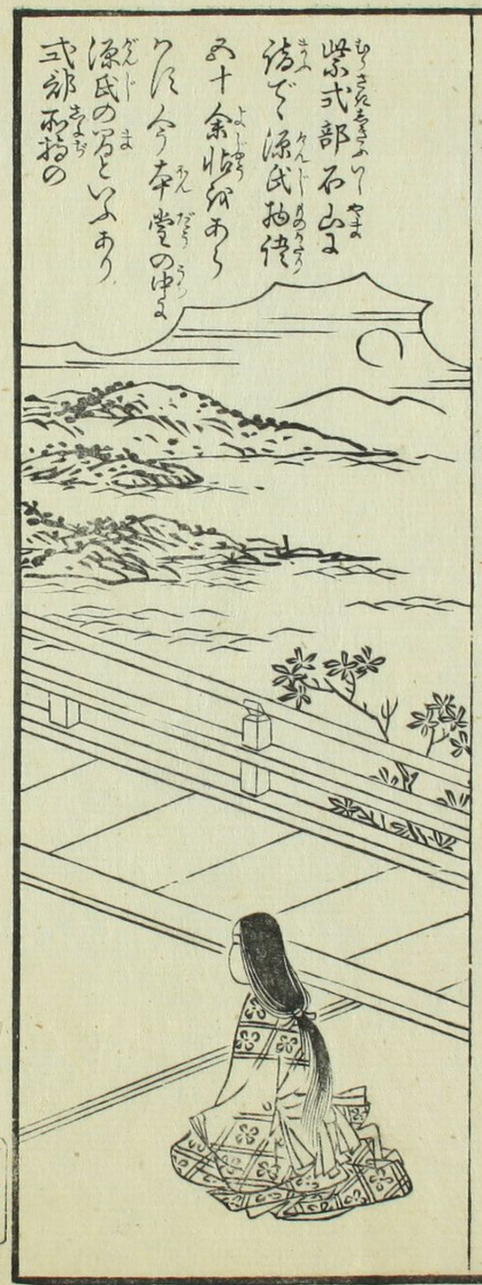
ヨリトモ塚
カタカタ塚
頼朝建立塔
月亭
鐘楼
祖師堂
八重橋
昆沙門堂
札堂
食堂

石山寺

紫女七論標題云

才德兼備　式部が才を賞し又拾遺の女房たりしかば比類なきさを
七事共具　なるべき名の学者なる二人の幼にして強明三人の看楽なり紀氏の公卿
修撰年序　私なる眼の肥えたる五人の時代中業を以て文章なる人法国の名匠を経
文章無雙　歴せし七人なるべし鄙のかう通ど
作者本意　式部が紫女の一作なりしかば加筆助作ありしかとの説よつて他の拾遺紙引て年紀をあらそ
一部大事　他の拾遺の歌をまぬかれざるもの使さるべし国情風俗官家田家貧乏困窮衰傷など妻〻く彼〻く
正傳説誤　もしく人情世態をのべ風倫〻て勧善懲悪の意を論ず
　冷泉院の時より付て異説あるべと論を
　この拾遺より洛拾遺ないわゆる他をこまうるべしもとむとあるべくせるとうつ
　つさてさらぬ他撰ともとあばて論を

紫式部石山に
籠て源氏物語
の十余帖あり
是今本堂の中に
源氏の間といへり
式部所持の



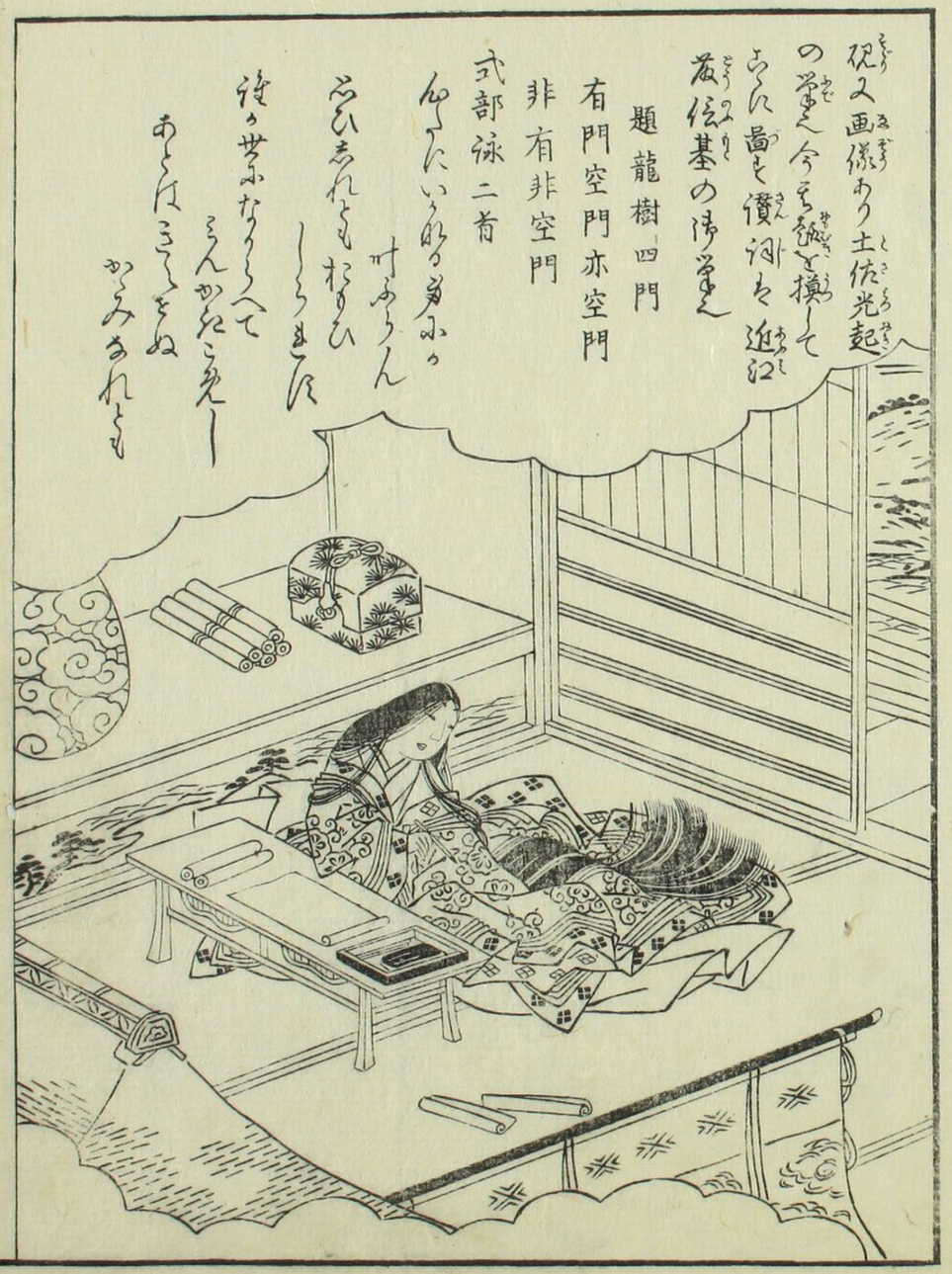
況又画像あり土佐光起
の筆今の世に換して
ふる間を償河を迎紅
葉伝基の侍筆

題龍樹四門

有門空門亦空門
非有非空門

式部詠二首

ものいふ物ゆふ
　　けふりうん
　　ぬれもなりひ
　　しらまた
後の世ふなりへて
　　うんかたえし
あるとこそをぬ
　　かみなれも



公で聖教をまるせる紙白ひの聖教とゝ寺に有り清祐の繪事知る人ゝ
此所の僧の妄說なるべし
○龍穴の池 本堂の西南よりあり旱のころ此池より雨を乞ばくるしるしありとぞ
○暦海尼掛石 龍穴の池のそばにあり昔暦海和尚とゝ人此石の上に座して讀經せし故其名あり
○弘法大師剃髮の名号 ○武部自筆の大版若帛 硯石 ○清祐白ひの聖教 皆寺宝とゝ人ども
都にも人や待らん石ゝの苔ふるき社の夜の月 長能

茅原の井とゝ人ゝ結ばれてもゆけらゝの石ゝふるき寺をそゝ人 茅原公條
○揺谷の瀧 勢田川旱水の時此瀧の苔よりサクナタリと称で家ゝ後戸の往山の下にて今ゝ伏の紛坊ゝもろは谷の送風ゝ○ 拾玉集 慈鎮のおゝ
修てるや揺谷より出たさん浪も花さく宮治の網代木
○ゝ人で宮治川も湖あの事ゝ勢田上揺谷紙ゝ宮治に入ゝ
○悪源太義平ゞ塚 本堂の西ゝ中ゝあり 義平は源義朝の嫡男ゝて十三歲
平治の戰ひに異なるわりひ出もなく遂会ゝ十九歲ゝて都ゝより
石ゝもるゝてば捕らるゝ六条ゝ河原ゝ斬て雜波三郎ゝ首を切らるゝ 年廿二歲其後法盛布引の滝
見ゝ出ゝまるゝ時義平の霊雷ゝ成ゝて雜波三郎を殺ゝ